

★読書週間は
11月です。

麻里布小 図書館だより



2019年10月
麻里布小学校
図書館

秋も深まってきました。日暮れも早くなり、本を読んで夜を楽しむのにいい季節です。テレビやゲームを消して、物語の世界へ入ってみませんか？

紙芝居の世界

麻小では朝、「読み聞かせ」として、本の紹介や、紙芝居をしています。最近では、4年生は、新見南吉の詩「島」を紙芝居にした「くじらのしま」を、5年生には宮沢賢治の「セロひきのゴーシュ」を観てもらいました。



- ・くじらとりは命がけだということが分かった。新見南吉が書いた詩を紙芝居にするなんてすごいと思った。(4年児童)
- ・詩も切ない感じだったけれど、やっぱり物語も切なかった。くじらがとれてそのかわりに父が亡くなる。子ども父の跡を継いで同じように亡くなると思う。くじらの母は、子どもを守るために自分がえじきになって、母のやさしさを知った。くじらの子どもも悲しいと思う。(4年児童)

- ・『セロひきのゴーシュ』は何度も読んだことがあったが、改めて紙芝居として聞いてみると、ゴーシュの音楽を愛する気持ちが伝わってきた。また、動物がゴーシュの元に来て、ドレミファを教わりたいと言いながら最後にはセロがうまくなっているという間接的な表現がとても面白かった。自分が最後にほめられてぼうぜんとしている姿を思い浮かべると、自分に重なるときがあると思った。(5年児童)
- ・語り口調が素晴らしく、物語の世界に引き込まれました。国語で学習している宮沢賢治のお話だったので、『注文の多い料理店』以外の作品に目を向けるきっかけにもなったと思います。(5年担任の先生)



紙芝居は、多くの観衆を前に演ずるように作られていて、遠くからでも見やすいように輪郭線がはっきりとして、絵が見やすく、映画のような「引き」や「ズ

ーム」などの手法も取り入れてあり、この辺りは絵本の作り方とは異なります。

「紙芝居」と聞くと、幼児対象か昔の街頭紙芝居のイメージがあるかもしれませんが、教育のために日本で発展してきた歴史があります。現在、児童書や多くの紙芝居を出している童心社という会社は、会社になる前は「教育紙芝居研究会」でした。

東大の松永健哉やキリスト教の伝道をする今井よねなどの人が中心になって研究し、難しい話でも、絵と話があることで伝わりやすく、楽しめるものを作って普及しようとなりました。

紙芝居を入れる箱のことを舞台といいます。紙芝居は世界一小さな劇場です。子どもたちの表情や、「わあ～、おおっ！」という反応が、教室を劇場にします。

麻小の子どもたちも、「わかりやすい」「声が違って面白い」「世界に入り込める」と喜んでくれていて、その子どもたちの反応で元気をもらい、「生の舞台」の良さを感じています。

(紙芝居は、読み手といわず、演じ手もしくは演者といえます。)

10月30日(水)

うち読のすすめ

- ①麻里布っ子みんなでやる
- ②宿題なしで読書
- ③ノーテレビ、ノーゲーム
- ④おうちの人も協力

★うち読カード(緑色)

の提出は

10月31日(木)です。